



羅針盤



清水 忠道
Tadamichi Shimizu

富山大学学術研究部医学系皮膚科学 教授

漢方薬との歩み

35年前、私が医師になったころは、「証(しょう)」に従った処方をするためには豊富な経験が必要であった。その後、2001年から漢方医学教育は全国80大学(当時)の医学教育カリキュラムに組み込まれたこともあり、現在活躍する若手医師は漢方を基礎から学ぶことができるようになった。医学生のと看から漢方に触れることができるようになったことは喜ばしいことである。

私自身は当初漢方薬にほとんどなじみがなく、本学に着任してから漢方薬の研究を始めるにあたり戸惑いを覚えた。そんな折、初代の諸橋正昭教授の随筆から、「和漢薬の研究を始めたのは、私がこの大学に赴任して間もない頃です」¹⁾という文章をみつけた。私が新たに漢方薬の研究を進める際に勇気づけられたことを思い出す。

10年前に、私たちはアトピー性皮膚炎の患者を対象に、漢方治療に関する意識調査を行ったことがある²⁾。富山大学附属病院は和漢診療科を有する施設であり、漢方薬治療を希望する患者はかなり多い。調査によると、過去に漢方治療を受けたことがある患者は過半数(57.2%)いた。全体の約4割(38.3%)の患者は今後漢方治療を単独もしくはステロイド外用薬や抗ヒスタミン薬との併用療法として望んでおり、漢方薬は治療選択肢の一つとして患者に認識されていると推察した。その他、診察医に望むこととして、痒みだけでも止めてほしい、早く完治したいなどの「治療・改善」を希望する意見と、薬の副作用の説明や生活指導をしてほしいなど「コミュ

ニケーション」に関する意見が多く寄せられた。

別のグループが行った意識調査をみると³⁾、全体的な評価では、漢方薬投与により重症度と満足度に有意な改善がみられたが、個々の症例では漢方薬による治療に満足していない患者が少なからず存在しているとの結果が報告された。つまり、漢方療法に対する期待が強すぎるため、患者は医師が期待したほど漢方薬の効果を感じていないようである。患者とのコミュニケーションの重要性を再認識した。

この10年間において、皮膚疾患の病態の解明は著しく進展し、その治療効果は劇的に向上している。たとえば、アトピー性皮膚炎や乾癬などの疾患に対しては、生物学的製剤やJAK阻害薬などの登場により、皮膚科医の治療法の選択は広がった。一方で、時には治療に難渋する皮膚疾患に対して、長い歴史をもつ漢方薬を次の一手として新たな治療法に取り入れることができれば、治療の幅がさらに広がることになる。そのためにも、漢方薬の臨床、基礎研究が今後ますます重要になってくると思われる。

文献

- 1) 諸橋正昭ほか：漢方医学 20：1, 1996
- 2) 上田智恵子ほか：漢方医学 36：299, 2012
- 3) 望月良子ほか：日東洋医誌 62: 133, 2011